

## 真の結婚愛を求めて

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを妻と名づけよう。これは男から取られたのだから。」(創世記 2:23：新改訳)

創世記のこの部分は、女性が男性の肋骨から生まれたと字義通りに解する人は、さすがに現代では全くいないと思います。天界の秘義でも、女性の誕生ではなく、最古代教会の墮落の始まりが内意として描かれています。最初に読んだとき、男女に関することは一切明かされていないことに肩すかしを受けたような気がしたことを覚えています。

しかし、「結婚愛」においては、その秘密が啓示されています。

「女性は、創世記の記述に従って、本当に妻に変化してゆきます。」(結婚愛 193)

本日の朗読の創世記第二章 18 節から 25 節の「人」の原語は「アダム」です。ところが 23 節と 24 節では「男：イシュ」とされ、同じ節で出てくる「女：イシャー」は著作では「妻」とされています。25 節では、「アダム」と「妻：イシャー」とされています。イシャーには女と妻の両義があり、これは女性の創造ではなく、女性から妻が誕生する姿が描かれています。

エホバが人、アダムを深い眠りにつかせ、肋骨を一本取ってその代わりに肉で埋め、そのあばら骨の一人の女を建て、アダムのところに連れてきます。するとアダムは、「男：イシュ」から取った、自分の骨の骨、肉の肉と認め、「妻：イシャー」と名付けます。

肋骨は、心臓と肺臓、さらには肝臓等の生命の基幹部分を守り、覆う、左右十二本ずつの骨です。骨は、自我(プロプリウム)の知的な部分を(天界の秘義 3812)意味し、その自我(プロプリウム)は、「すべてあらゆる行動、学ぶ事、伝える事を、隣人や公共、教会や主を目標に考えず、自分を目標にして考えることです(天界の秘義 5660-3 参照)。

自分を目標にして考えることが、自分が生きている証拠だと思ふ状態が「眠っている」状態と呼ばれます(天界の秘義 150)。「胡蝶の夢」という中国の荘子の話があります。人が眠って自分が蝶になった夢を見ますが、蝶になった自分か、起きた自分が夢なのか、本物の自分はどちらかわからないという夢です。この話のように、覚醒したと思っている自分が、幻であり、夢の中の自分が、正しい自己を表しているのかもしれない。御言葉に出てくる眠った自分は、今現実世界の中で、自分の目標をあくせく求めている偽りの自我だということです。

また「御言葉では、肋骨が象徴的に意味している、霊的な意味は、肋骨ではなく、自然的真理のことを言います・・・人の胸は女性の胸とは異なった本質的特性があり、それは知恵です。なぜなら肋骨が胸を支えるように自然的真理は知恵を支えているからです。胸は人の大切なすべてがあるところで人の中心です。」(結婚愛 193)

世間の中であくせく考えている自分の内から、以前あるいは本当に自分が考えている本物のあるべき姿を持ってきてくれて、そっと本来の自分を取り戻させ、気づかせてくれる女性の姿をイメージすれば、本物の結婚愛が見えてくるかもしれません。すなわち、女性は男性の外的な部分を問題にせず、内的な部分を大切に、自分の中で育み育て、その内的なことから男性に近づきます。神は人からとった肋骨で、一人の女を建てますが、「建てる」には、「欠落したものから構築する」（天界の秘義 153 参照）という意味があり、その男性が抱いていたはずの自然的真理を、改めて構築して生きたものとして男性に示すと、男性は、これこそ自分の骨であり、自分の肉であると言います。ここで男性と女性の中に内的な結合が生まれ女性は妻となります。

「女性は男性から創造されますが、それは男性に独特の知恵の複製と移植により、それは自然的真理からなされます。すなわち、男性の知恵に対する愛が、結婚愛となるため女性に移されます。」（結婚愛 193-2)

「妻は夫のイメージを自分の中に受け入れ、それをとおして、夫の情愛を自分に同化します。またそれをおして夫の内部の意志を自分の意志に結びつけ・・・これをおして夫の靈魂の産出増加を」行い、「これは妻が行うことですが、むしろ妻をおして主のなさることでもあります。主は女性の中にこれを行う傾向を注いでおられます。」（結婚愛 193-3)

男性は女性によって魂が成長します。なぜなら男性はより高い知恵・英知へと進んでゆきますが、女性がいなければ、それは必ず自己愛、自分の能力の高さへの愛にゆがんでゆきます。女性の知恵自体への愛、英知自体への愛がなければ、知恵や英知を得たことへの自分への能力の高さに慢心して、自己愛へと向かい、奈落の底へ落ちてしまいます。

この結婚愛の生成の仕組みから、二つわかることがあります。

それは、本物の結婚愛は、主が働き生まれ、それを男女が共に受け入れるということであり、もう一つは内的な結合である、ということです。

この世での結婚は、おもに外的基準によって為されています。

家柄、経済的地位、名誉、背の高さ、美醜などの見栄え、あるいは見せかけの優しさ、力強さなど、外的なものを基準に結婚を考えます。

男性が考える理想の女性は、健康で若く、顔・体の容貌が魅力的で、立ち居振る舞いも素晴らしく、料理が上手で、家柄もしっかりしている、・・・などが、世の中にある外的基準です。

女性のほうも、男性は、「イケメン」で背が高く、経済的に独立し社会的地位もあり、男らしくが自分だけには優しく振る舞ってくれそうな不良・ちょい悪タイプ・・・と外的基準を求めます。

また、女性の表面的優しさ、男性ではまじめさや、あるいは自分だけへの優しさなど、少々内的なものを求めるかもしれませんが、外的基準の域を脱してはいません。内面的な結びつきがなければ、また主の導きがなければ、本物の結婚愛は得ることができません。結婚愛は、最初からあるのではなく、主に導かれ、二人で育み、育ててゆくものです。

創世記第二章にはエデンの園を潤す川のことが書かれています。

良質の金や他の宝石のあるハビラの全土を巡って流れる川ピション、これは愛の善を意味し、クシュの全土を巡って流れる第二の川、ギホン。これは善と真理の認識、第三の川の名はアシュルの東を流れるティグリス、すなわち理性、そして記憶知を意味する第四の川ユーフラテス。(天界の秘義 110～117)

この流れをさかのぼり、記憶知を学び、理性を磨き、善と真理の認識を通して愛の善を目指す目標とするなら、二人は本物の内的なものに向かって進むことになります。誠に二人三脚で、愛の善を目指すならば、慢心や知性のおごりに惑わされず、その目的に至ることができます。男性だけ、あるいは女性だけで至ることは、不可能です。また、主に導きを仰がなければ、この結婚愛を実現するのも不可能です。

たとえ、二人の奏で、醸し出す音が、ぴったりと琴瑟相和しておしどり夫婦と言われても、それが外面だけで、主に導かれた内面を深め、そこでの結びつきがなければ、結婚愛に至ることはできません。二人がそろって主の導きを仰いでゆきます。

この世では、子供の養育や、世間体、経済的なことなど、二人を擬似的な結婚愛の形の中に入れ、一時的な家庭を作る外的な要因が多数あります。しかし、二人の絆が外的なものに留まるのであれば、他生では、必ず別れがやってきます。他生で二人は必ず出会い、しばらく共に暮らすことになりますが、内面の結合がなければ、必ず別れます。他生では、内面と外面が分離することは許されないからです。分離は見せかけだけで、本人たちは幸せではないからです。結婚を繰り返した人も、必ず順に過去に結婚した相手と暮らし(結婚愛 47)、別れるか、ずっと一緒にいるか、あるいはさらなる相手を探すことになるか、すべて内面の結びつき次第ということになります。

特に新教会の人間は、今の相手は、所詮外面的な結びつきだけで、他生では内面にじっくりくる相手が与えられると考えるかもしれません。また独身の方は、今生では無理でも他生で理想の相手と結ばれるはずだからこの世はどうでもいい、と考えるかもしれません。

しかし、こう考えて、主の導きと、自分の内面の成長を求めず、結婚愛を大切にす気持を失ってしまえば、他生での成長と理想の結婚もできません。すべてこの世と他生はつながっており、この世の延長線上に来世の自分があることを忘れてはなりません。もし、相手がいて、今生の結婚愛を捨て、来世だけの理想の愛を求めることは、今生で離婚届けを出すようなものであるからです。「不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯」(マタイ 19:9) すことになります。よほど明らかに悲惨な「不貞」の状態でない限り、今与えられた状態の内に絶えず理想の結婚愛を求めるよう努力する、これが大切ではないかと考えます。

結婚相手を失い、未亡人や寡夫となった場合はどうでしょうか。特に「未亡人の状態は、寡夫よりもより深刻」(結婚愛 325) だと言われています。未亡人は、自然的・社会的な弱者ということの他に、霊的な起源では保護がないことが意味されます。善だけでは真理からの保護がないからです(黙示録啓示 746)。世の拘束がなくなった他生の相手は、さらに内面に向かって進んでゆきます。今の状態を嘆くことなく、相手が内面で求めていたものを振り返り、自分もさらに内面に向けて進んで行きます。すると内面の結びつきは失われることなく、今世においても来世との結びつきは絶えません。ただ、周りから、教会から真理を得、周囲そして教会も真理の保護を与え続けなければなりません。やもめを養うことは、御言葉に

ある仁愛の実行です。

独身の方々、相手を見つけても世の障害に妨げられた方、まだ相手を見ない方、皆やるべき内容は変わりません。目的が同じ相手とは、必ずいつかどこかで出会います。時間や空間、さらには世のしぐらみがある今生では必ずしも実現はできなくても、時間・空間、世の事情がない来世では、間違いなくその特定の人間との出会いが待っています。そのためやるべき事は、相手がすでに見つかった方々と大きく変わりません。異なるのは、喜びが目の前にはなく、ちょっと先に待っているだけです。邪な愛欲を避け、主の導きに従って内面を広げ求めて行くことで、未来のまだ見ぬ相手と共に歩むこととなります。

それぞれ男女に本質的な内的部分の結合が結婚愛ですから、同性愛やその他のアブノーマルな姿では、決して真の結婚愛に至ることができないことも明らかです。

異常な愛、不倫や姦淫を悪として避ける生活を送り、もし身近に相手がいるならば、二人の信頼と友情を育み、相手との内的なものの結合を進めることによって、最高の天界の天使のように、男女は一体となるほど結ばれ、あらゆる表現を超えた至福の状態が与えられます。その情景を「結婚愛」の書はこう描いています。

「最高の第三天界から、ひとりの天使が乗った馬車が姿をあらわしました。ところが近づいてきて、そこに二人いるのが分かりました。・・・妻の場合は次のとおりです。その顔はわたしの目に見えたり見えなかったりしました。美そのものという点で見えましたが、表現できないという点で見えませんでした。その顔は第三天界にいる天使たちがもっている光のような、燃えるような光の輝きを放っていました。・・・かの女は、それで夫から体をそらせました。それでわたしはよく見ることができました。かの女の眼は申しあげたように、燃えるような光を放つ独自の天界の光で輝いていました。それは〈英知に属する愛〉からくる輝きです。第三天界では妻は夫を愛しますが、それは英知から出る愛、夫の英知にひたった愛です。そして夫は妻を愛しますが、それは以上の愛から出るものであり、夫自身にたいする善の愛の中に宿ってくる夫の愛です。このようにして一体化します。かの女の美しさについては、どんな画家でも、描きとることも〈かたち〉をとらえることもできません。」（結婚愛 42 アルカナ訳）

すべての方がこの美しい真の結婚愛にむけて歩いていきますように。アーメン

\*\*\*\*\*

#### 創世記 2:18-25

神であるエホバは仰せられた。「人が、ひとりであるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

神であるエホバは土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生き物につける名はみな、それがその名となった。人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった。

神であるエホバは深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、

そのところの肉をふさがれた。

神であるエホバは、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

#### マタイ 19:3-9

パリサイ人たちがみもとにやって来て、イエスを試みて、こう言った。「何か理由があれば、妻を離別することは律法にかなっているでしょうか。」

イエスは答えて言われた。「創造者は、初めから人を男と女に造って、

『それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる』と言われたのです。それを、あなたがたは読んだことがないのですか。

それで、もはやふたりではなく、ひとりなのです。こういうわけで、人は、神が結び合わせたものを引き離してはなりません。」

彼らはイエスに言った。「では、モーセはなぜ、離婚状を渡して妻を離別せよ、と命じたのですか。」

イエスは彼らに言われた。「モーセは、あなたがたの心がたくななので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったわけではありません。まことに、あなたがたに告げます。だれでも、不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです。」

#### 結婚愛 193 (アルカナ訳)

⑧ 女性は、創世記の記録にあるように、一人の男性の妻になるよう、現実的に形づくられていく。

創世記には、女性が男性の肋骨から造られたとあります。女性が連れてこられたとき、男は「かの女は、わたしの骨から出た骨であり、わたしの肉から出た肉である。男 *isch* からとられたものだから、女 *ishshah* と呼ばれるであろう」(創世 2:22~24)と言いました。

〈みことば〉で胸の「肋骨」というと、その霊的意味では自然的真理以外のものではありません。動物のクマが歯のあいだにくわえていた「肋骨」もその意味があります(ダニエル 7:5)。ここでの「クマ」は、〈みことば〉を自然的意味で読み、そこにある真理を理解しないまま見つめている人のことです。男の肋骨とは、女性の胸とはちがったその本質的固有性です。それが英知であることは、(187 節で)前述したところを参照してください。肋骨が胸部を支えているように、真理は英知を支えるということです。胸部は人の中央にあって、人のすべてがあるということで分かると思います。

(2) 以上からはっきりします。女性は男性から創造されましたが、それは男性にある固有の理知を女性に写し植えたことによります *per transcriptionem ejus propriae sapientiae*。つまり女性は自然的真理から造られたもので、自然的真理の愛が男性から女性へと移植され、結婚愛になりました。こうなったのは男性の中に自己愛が宿らないで、それがむしろ妻への愛になるためでした。妻自身は、男性にある自己愛を、妻にたいする愛に転じさせる生来の能力をもっています。

そしてわたしが耳にしたことですが、これは男性も意識しないし、妻も意識しないまま妻の愛自身から行われます。たしかに自己愛に根差し、自分の理知にうぬぼれている相手を、本当の意味での結婚愛で愛することは、だれにもできないことなのです。

(3) 男性から女性が造られたという秘義が分かったあと、結婚の中でも女性は男性によってあたかも造られ形成されていくように思われます。これは妻が行うことですが、むしろ妻をとおして主のなさることであります。主は女性の中にこれを行う傾向を注いでおられます。妻は夫のイメージを自分の中に受け入れ、それをとおして、夫の情愛を自分に同化します(前 183 節を参照してください)。またそれをとおして夫の内部の意志を自分の意志に結びつけますが、これについては後述します。またそれも後述しますが、これをとおして夫の靈魂の産出増加を自分に課するわけです。

創世記にある記述を内的に理解することによって、女性が妻にかたちづくられるわけがこれではっきりすると思います。妻は夫とその胸から取られたということ、それが妻に刻印されているということです。